

---

# IS『に』転生ってふざけんな！

出川 戦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ISに『転生つてふざけんな！

### 【ISBN】

N4278Z

### 【作者名】

出川 戦

### 【あらすじ】

この物語は、主人公が福音に転生して様々な困難に操縦者のナターシャと共に立ち向かっていく物語である。

## 第1話（前書き）

完全なる思いつきです。連載という判断で大丈夫か・・・?

気付くと、俺は真っ暗な空間にただ1人いた。

(なんだ・・・)「は・・・?夢の世界ってヤツか?」

「ここはあなたの処刑場です」

女性の声が聞こえた。 つてちょっと待て!

(なんだよ処刑場つて! ていつかあんた誰だ!? あれ? 声がない・・・)

「私は神様です。ここではあなたは魂だけの存在なので声は出ません」

(ああ、なんだそういう事が・・・つて納得できるか!...)

「五月蠅いですよ」

神様(自称)は冷たい声でそう言つた。

「まず説明しなければなりませんね。人の寿命は、その人が生前犯した罪によって減つていきます」

(あ、ひょっとしてそっちの手違いでまだ死ない俺を殺しちゃつたからどつかの世界に転生させてくれるとか・・・つて俺死ん

だのー? )

「やうです。あなたは死んだんです。あと、私たちは手違ひなんてしません。なんせ全知全能ですから!!スなんてあるハズ無いのです」

(おおつふ・・・・じゃあ、なんで俺ここにいるの? )

「あなたは小学生の時、同じクラスの子からゲームを借りたまま返しませんでしたね? 」

(・・・・・)

「さりにあなたは別の子から借りたマンガを返さなかつたり、アンティルールで決闘したりしましたね」

(・・・・・はい・・・・・)

「さりにあなたは物心ついた頃からつまみ食いをし続けていましたね」

(ちよつと待つてくれ! そんな程度で寿命削られてたのか!?)

「そうですね。積もりに積もつた小さな犯罪が実を結んで、こうして10代でめでたくぼっくり逝く事になつてしましましたね(笑)」

((笑) ジャねえ!! 何が悲しくて17で死ななきやならなかつたんだよチクショウ! )

「あ、一応言つておきますけど、あなたは本当は13歳で死ぬ」とになつてました」

( なお酷いわー！…………って、おい。それはどうこう事だ？ )

「あなたは非常識なほど懸運が強かつたので、何度も死神が迎えに行きましたがあなたが死ぬことはありませんでした。なので私が直接手を下す事になつたのです」

( ・・・俺つて、何度も死神に迎えに来られてたんだ・・・ )

「つたぐ、役立たずが・・・・。それで、私が直接人の生死に手を出す事はあまり望ましくない事なので、その処置としてあなたをどこのか適当な世界に転生させます」

( 今、神様が真っ黒になつた気が・・・・。ついでこれ、棚ボタなんじやないか？ )

「あなたが思つてゐるほど楽な世界なんてありませんよ。それじゃあせめて行く世界くらいは選ばせてあげましょうか」

( なりHの世界で一ちゃんとHS動かせるみつけてくれよー )

「誰が貴様のよつなゴリ虫の言つ事なんか聞くか」

( ・・・・あれ？なんかキャラ変わつてない？ )

「『』た『』た五月蠅い！ HSですね！ それでは逝つてらっしゃーい」

( 字違ひーー・・・・あれ・・・・なんだか意識が遠のいていく )

(・・・・あれ？ じにはどいだ？)  
俺が意識を取り戻すと、目の前には何台もの機械と大勢の研究者が忙しそうにしていた。

(あ、まさか俺、こここの研究者にでも憑依転生したのか？それにしても、こここの研究者は外人ばっかだな。外国語なんて何も出来ないぞ、俺)

などと考えていたら、俺の方に向かって金髪の20歳くらいのすげー綺麗な女性が歩いてきた。服装はレオタードのような格好をしている。おそらくアレがISステッジだろう。

(・・・つてちょっと待て！あの人なんで俺の方に来てるんだ！？まさか俺の事が好きなんじゃないだろ？！）

その時、俺は気付いた。『俺、さつきから声出してなくね？』と。

そして目の前の女性は・・・・・3巻末と6巻の初めに出でてきたナターシャさんじゃないか！

まさか・・・・まさかとは思うが・・・・俺、ちゃんと人間に  
に転生してますよね、神様ア！！

「これからようしきね、『シルバリオ・ゴスペル銀の福音』」

やつぱりかああああいーーー！

## 第1話（後書き）

ウザい主人公でいいません……。

ナターシャは福音の事を「あの子」としか呼んでいなかつたので、最後の方は悩みました。悩んだ結果がアレですが……。

「なんでナターシャが日本語で挨拶しているの?」という質問には、担当者が不在のためコメントできません。

下らない文章になるでしょうが、応援よろしくお願ひします。

## 第2話（前書き）

「作者でーす」

神「神でーす」

「とゆーワケで、今作の前書き後書きは私達2人が進行させていただきまーす」

神「よく神界まで来れたな」

「ほら、作者って言ってみれば神様より上じゃん。言ってみれば界王様じゃん。だからフツーに来れるんだよ」

神「あ、そ」

「反応薄いなー」

神「じゃあ今回は主人公君の生前犯した罪について、まだ書いてなかつた細かいところも説明してさしあげましょ」

「でたよ、上から目線」

神「d m r k s。彼は1話で述べた他に、授業中にマリカしていたりモンハンしていたりしていた」

「みんなもよくやつてるよね」

神「黙れ喋るな息をするな。他にも小2の頃から菓子パンやお菓子を持ちこんで早弁していた。中1の時は弁当だったので、早弁用の弁当を持って来ていた始末だ」

「そりやすごい」

神「あとは・・・・昼休みに決闘デュエルしていた

「私もやつてますよ、ソレ」

神「さらに小1の時『お菓子あげるからついておいでよ』と知らない大人から声をかけられた時に、鼻で笑いながら『今時そんなのいや2歳児でもついてこねエよハゲ。警察に突き出されたくなかつたら財布を置いてさつさと消えな』と言い放つたり

「それはひどい・・・・・」

神「他にも余罪はあるが・・・・あまり長くするのもなんだ。これ

「ひりおひでじてここへ  
『やだね。では本編どおりや』

(これ、終ったんじゃね?)

俺はまずそう思った。本当なら頭を抱えて絶叫して、なにか硬い物に頭部をぶつけてしまいたい衝動に駆られているのだが、なんせ手足が動かない。ついでに言うと口もきけない。なにこのプレイ。誰得?

「これからよろしくね、『銀の福音』」  
シルバリオ・ゴスペル  
俺得でした。

(キタだろコレ!)

目の前にいるのは福音の操縦者のナターシャ・ファイルスさん。アニメで出てこなかったのが悔やまれる、挿絵で見た時「なんで2組の鈴がいてラウラがないの?」と思いながらも「なにこの新キャラのまさかのハーレム乱入」とかずつと考えて6巻で再登場した時にテンション上がっちゃった俺の好きだったキャラだ。リアルで見るとはすっげー美人。

まあどこのつまり、何が言いたいのかというと・・・・今、彼女はISースーツを身につけている。という事は、今からISに乗つたりするわけだ。

そのISが何かって?決まっているだらびこの俺、『銀の福音』だ!  
シルバリオ・ゴスペル

つまり彼女のナイス・ボディに俺が隙間無くくつつくわけで・・・  
・・ヤバい。考えただけで鼻血が・・・あ、鼻無いんだっけ。つい  
でに血も通つてないわ。

（いや、そんなブルックみたいなネタを一人でやつてんじゃねえよ  
！）

などと俺が至極どーでもいいことばかり考えて興奮していると、ナ  
ターシャさんは俺の頭？の部分に優しく手をかざした。

「・・・・・？」

「どうかしましたか、ファイルス？」

研究者の1人がナターシャさんに尋ねたが、ナターシャさんは「い  
いえ。何でもないわ」と答えた。

・・・・・つか、英語で喋ってるんだよな。なのに普通にわかつて  
るぞ、俺。やっぱHSになつたから頭の方も良くなつてるものかもし  
れん。

「（氣のせいいかしら・・・・。いつもとHSの反応が違うような氣  
が・・・・）」

初期化と最適化が終つて気付いたのだが……。ＥＳの装甲には、俺の感覚といつもの通つていなかつた……。

どういう事かといつと、俺は初め、ナターシャさんの身体に密着するという事に対して興奮していたのだ。福音は装甲部分が結構多いから、ほとんど全身を同時に触つていられるという変態的思考で考えていたのだ。

だが現実は違つた。

ＥＳの装甲部分に感覚が無いという事は、触つている感触もクソもないのだ。ただ意識だけがＥＳの中にある　　今の俺はそういう状態なのだ。

(期待した俺が・・・馬鹿だった)  
心底俺はそう思つた。

「ファイルス、調子はどう?」

オペレーターの女性がナターシャさんに訊く。

「うーん……なにか、違和感を感じるのよ。まるで誰かが私のすぐ近くにいるような……」

当たらずも遠からずです、ナターシャさん。俺がその誰かです。福音です。

「まだ一次移行<sup>ファースト・シフト</sup>もできていなし……チーフ、一度コアをリセッタするべきではないでしょうか」

(……は…? ちょっと待つてくれ! もしコアがリセットされたら、俺はどうなるんだ!?) このまま何もせずにナターシャさんを間近で見られてお終いか!? あ、冥土の土産に丁度いいかも……ってそうじゃない! セツカくなんだからこのままシヤルやラウラたちとも会わせてくれよ! 臨海学校編でよオ!)

ISには、意識と似たような物がある……そいつ言ったのは、たしか山田先生だ。

その意識が俺だとしたら、コアのリセットは俺の消失に繋がりかねない。だから一刻も早く俺はナターシャさんの専用機にならなければならぬんだ!

(がんばれ俺! やればできる! びつ頑張ればいいのかわかんねけど!)

とりあえず一次移行が終りますよ! ひと元気にした誰かさんにお祈りを捧げると……

『初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押して下さい』

ディスプレイにそう映し出されたのが解つた。

「つえ！ さつきまで両方とも進行度がたった3パーセントだったのに・・・・・！？」

そんなバカな。あれからけつこう時間経つてたぞ。なのに3パーセントおかしいだろ。機械壊てるんじゃねえか？

「まあいいわ。それより、一次移行が済んだんだから早くテストを始めましょう

ナターシャさんは研究員に向かつてそう言つた。

(ん？ テストって・・・・？)

俺がその疑問に気付いたまさにその時、目の前のシャッターが上がり、奥の戦闘スペースと思われる東京ドーム何個分かの広さの橢円形のスペースが姿を現した。

(コレは・・・・ILSのバトルフィールドか・・・・？)

アニメで見たアリーナの地形と酷似しているそれに、ナターシャさんは迷い無く俺を連れて行く。

今ので解つたが・・・・・ビリやーら、福音の操縦はナターシャさんによるそれが優先されるようだ。つまり、俺の意志は在つて無いようなモノ、か・・・・なんだか悲しいな。

（まあでも、間近で工事の戦闘が見られると思えば、少しは気も楽になるつてか）

俺は工事はアニメから入った。2話目を観て、すぐに原作を買った。その理由は、アニメで観た工事の戦闘シーンがすごく面白かったからだ。原作には軽く失望したが・・・。

キャラも可愛かったから好きだが・・・やっぱり、俺の中では戦闘が一番だ。

だから別に、俺自身が戦闘に参加できなくても構わない。すぐそばでアメリカトップクラスの操縦者の戦闘が観戦料タダで見続けられるんだ。こんなにいい話はそう落ちてないねきっと。

・・・・はい。強がりです。自分も専用機持つてこの大空に翼を広げ飛んで行きたいです。翼をください。屋内なので大空は見えませんが。あと翼はもうあります。まだ一次移行してないから機械っぽい多方向推進装置ですけど。

マルチスラスター

とかなんとか考へてる間に、俺とナターシャさんの正面にネイビーカラーのIS アレは、フランスの第2世代型の、ラファール・リヴィアイブか

が現れた。

（まさか、いきなり実戦つていつヤツじゃ・・・ないわけないか）

思えば一夏もそうだつた。いきなり代表候補生のセシリニアとタイムで闘うという無謀な挑戦だつた。

だが俺は一夏の一歩三歩先を行く！ なんて言つたつて、こつちは専門的知識すら単語1つも理解してないどころか見てすらいないんだからな！

（とか何とか言つても、ただ見てるだけなんですけどね～）

向こうは第2世代型だから多分一瞬で勝負が着くかな、と俺が思つていた時だつた。

リヴィアイブがアサルトライフルのロックを外したのが伝わつて来た。これは撃たれるな。

だがこつちの操縦者はアメリカで最強のIS操縦者の1人だ。さらにこの福音は高機動と高火力を兼ね備えた機体だ。

こんな牽制なんて華麗に避けて迎撃する間もなく反撃してくれるに  
違い

バカアアアンッ！

バリアー貫通、ダメージ89。 シールドエネルギー残量、911。  
実体ダメージ、レベル中。

（痛てエ！？ なんだコレ！？ 感覚ないクセに痛覚だけあんのかよ！！）

俺は脚部に感じた痛みに戸惑いながら、なぜナターシャさんが避けなかつたのかを即座に考えていた。これもISになつたお陰なのか？すぐに最善の判断ができるんだけど。

で、その結果浮かんできた仮説が・・・・・『俺の動く意志に比例して、ナターシャさんの反応が福音へ伝わりやすくなつたり伝えりこべくなつたりする』というのが真っ先に浮かんだ。

(ちょっと待つてくれ！　俺は戦闘訓練なんて全くやつて無い、ズブの素人なんですか？！？)

あと、今の俺は福音に搭載されているハイパー・センサーで全方位が視覚として認識できるんだけど、研究者の皆さんがなにやら不穏な動きを見せてるんですけど・・・・。

(まさか、コアのリセットか福音<sup>オレ</sup>の廃棄処分についての判断じやないだろ？！？)

## 第2話（後書き）

「おっと、まさかの3話目で完結か？」

神「いやさすがにそれは……」

「そういえば、彼がなにあなたに祈つてましたけど、何かした  
んですか？」

神「特に何も。やううと思えば何でもできるけど」

「……それでも、このままだとホントに次で連載終了す

んじゃね？」

神「大丈夫だろ。ドラゴンボールの悟空や悟飯、だつて何度も死にか  
けてるのに、蓋を開けてみれば死んだのは悟空が2回だけじゃない  
か」

「身も蓋もない事言うなよ。盛り上がりたいだろ」

神「そういう発言は控えろよ」

続く

### 第3話（前書き）

「今日は寒かった」

神「唐突だな」

「関係無いけど、部屋でストーブ点けてさあ執筆だ、と思つたらマウスの電池が切れてたり」

神「ふむふむ」

「かと思つたら、実はマウスの電源がオフになつてただけだったり」

神「残念なヤツだな」

「まあ 雑談はこれくらいにして本編始めますか」

神「本当に終わつたら面白いんだけど」

### 第3話

(考えるー、なんとかしてこの圧倒的なまでの危機的状況を打破するんだッ！－)

このまま死ぬのはまっぴらぐ免だ。だつてせっかくナターシャさんと会えたんだもん。このまま近くにいたら風呂場とかまで一緒に持つて行ってくれ……じゃない。ISの戦闘を直で感じられないじゃないか！－

(やつてやるー、やるしかないんだ！－)

「（どうこう事なの……！？ 福音が私の動きに全くついてこない！）」

私は、今までとのHISとは全く違う福音に心惹かれていた。

そもそも、HISの『銀の福音』<sup>シルバーリオ・コスペル</sup>は国際条約違反の軍用HIS。前まで操縦していた量産型や競技用のHISとは少し勝手が違うとは思っていたけど・・・・HISまで違うものなのとは思っていなかった。

HISによる視覚補正で、研究所の職員が信じられないという顔で私を、福音を見つめていた。やっぱり、の人達にも想定外の事なのね。

「（HIS）は一度引き上げて、検査してからもう一回テストするのが賢明ね・・・・」

私がテストを中断しようと、通信回線を開こうとした時

微かに、声のようなものが耳に入った。

「え、そうじゃない。耳で聞いたんじゃなくて、もっといつ・・・・『感じた』とでも表現するべきな感覚。

「（まさか・・・・でも、他に考えられない）」

HISには意識と似たようなものがあり、HIS側が操縦者の特性を理解する事でその性能をより引き出させてくれるというのは有名な話だけど・・・・これほど顕著に表れるモノなのかしら？

でもさういきの声のような・・・福音(イエス)の叫び聲、あつ  
と聞いたいと言つてはいたわ。正確には解らないけど。

「（一緒に、飛びましょっ

銀の福音ー）」  
シルバリオ・ゴスペル

（・・・・・？）

なにか聞こえた気がした。それも音じゃなくて・・・・なにか、  
こう心に直接響いてきたというか、テレパシーみたいのが。テレ  
パシ - なんでしたこともされたこともないから、わかんねエけど。

（とにかく、今はあのコーカイブをどうにかしなきゃな）

確か福音は広範囲攻撃ができたな。下手な鉄砲でも、全方位に攻撃できるなら一発は当たるかもしね。

(名前なんだつたつけ・・・・・・そうだ、たしか《銀の鐘》シルバー・ベル)

ピピピッ！  
『銀の鐘』起動 シリバー・ベル  
攻撃を開始します

マルチスラスター  
翼のような多方向推進翼に搭載された砲門36全てが開かれたのが  
解った。

(モーションは・・・少し遅んで、一回転だったつけ)

俺がアニメで見た記憶を呼び起こし、イメージを作る。背景はもちろん夕焼け空だ。アレはカツ「良かつたなあ。

すると、俺の身体・・・つまり福音は遂に動き出し、360度全方位に羽のようなエネルギー弾をバラ撒いた。

バトルフィールドの壁とかはエネルギー・バリアーで防御されているので、壁が壊れたりすることは無いのだが、それでもその中にいたリヴィア・イブは銀の鐘をモロに食らつたらしく、大ダメージを受けていた。

(いや強すぎだろ『銀の福音』シルバリオ・ゴスペル！！)

アニメではラスボス的扱いで、原作では第4世代型2機に墜とされたが・・・ここまでとは思わなかつたぞ、軍用IS。

なんかさつき、近接戦に持ち込むと感じたんだが・・・俺、素人だつて言つたじやん！ でもここで動かなかつたらまた体勢を立てなあされて撃たれるだろうな・・・。痛かつたんだよな、撃たれたりすると。

『銀の鐘』と表示されたアイコンが、私の前に突如現れた。

「（）の子が・・・私の気持ちに答えてくれたの？」

すぐに私はアイコンをアイタッチして、銀の鐘を起動させた。

すると、今から私が動くべきイメージが頭の中に流れ込んできた。

その動きを忠実に再現し、頭から生えた翼のような多方向推進翼の砲門からエネルギー弾を放つ。

圧倒的なまでの数のエネルギー弾が、フィールドの中全てを焼き尽くした。

そしてもちろん、その的となつた相手のリヴァイブには相当のダメージを与えた。

「（流石は軍用・・・出力がケタ違いね）」

でも油断は禁物。相手もアメリカの優秀な操縦者が搭乗しているわ。現にあれだけの火力の差を見せつけられても、まだ闘いを諦めてはいない。すぐに体勢を立て直し始めている。

この子の性能スペックは、攻撃力だけじゃなく機動力も高かつたハズ。今は出力を抑えて通常戦闘仕様にしてあるけど、本来は超高速で動けるほどのスピードがある・・・。

「（）は近接戦で一気に攻めて、勝負を着けるべきねー。」

ギュン――ツ――！

「…………？」

私は今起きた現象に、驚く事しかできなかつた。

私はただ『一気に近付こう』と思つただけなのに・・・・・この子は勝手に、イグニッション・ブースト瞬時加速と間違えるほどの急加速で相手に近付いた。

まだ接近すると命令していないのに、私の判断を上回る速さで「の子は動いた。

「（本当に、ビームでも変わった子ね）」

「あああああ。やべえ、今のはヤバかった。

ナターシャさんが近接戦をしようとしたような気がしたから、急加速で近付こうとしたのに・・・その急加速が半端ねエ！危うく墜落するところだった。一夏みたいに。

寸前のところで急停止が間に合ったから良いものの、一度こんな肝を冷やすような事はしたくないね。

(そういうや、俺って福音<sup>福音</sup>がどれだけの性能を持つているのか知らないんだよな。まあ、表とか見せてもらつても解るとは思えないけど)

え？ なんでだらだらそんなに喋つていられるのかって？

それは、もつ戦闘テストが終つちやつたからなんだよな・・・。

接近中に近接武器がないかと探してたんだけど・・・福音<sup>オレ</sup>、武器が翼しかなかつたんだよ。刀1本の一夏の気持ちがよく分かるぜ・・・。

だからそこからまたエネルギー弾を乱射して、そのままゴリ押しして戦闘終了。ああ、高火力つて素晴らしい。

そういうえば、ナターシャさんは俺が突っ込んだ時に（リヴィアイブに急加速したこと。べ、別に他の意味なんてないんだからねっ！）ビックリしてたから、俺の意志が優先される場合もあるって事か・・・。

まだまだ解らないことだらけだな、この状態。

とにかく今日はもうお終いみたいだし、今後の俺の行方はまさに神のみぞ知るつてことだ。

あの神様だけが、な。

### 第3話（後書き）

神「終わらなかつたね」

「当たり前ですよ。3話で終了」つてちょっとした記録ですよソレ

神「つち。つまんねえの」

「それはそうと、知ってるんですか？」の先

神「そりやあ神だし」

「ですよねー」

神「つーかさ、福音に近接武器無いってホントなの？」

「知らない事あるじゃん。福音戦では一回も、そういう描写は無かつたんですよ。だから持たせようかとも考えたんですが・・・やめておきました」

神「コレは今後に大きく影響を与えますね。先は考へてあるの？」

「あと2・3話分は。それから先は・・・どうじょうつか？」

神「終りで良くね？」

「せめて10話はやろうよ」

続く

## 第4話（前書き）

神「なにか言いたい事があるんじゃないのか？」

「この小説書くのがなんだか楽しくなつてきたんだけど」

神「あ、そ。でもほどほどにしておけよ？蓮舫の時みたいにクレーム来たら一瞬で消えちまうんだから」

「ですよねー。日本の表現の自由はいろいろ制限が付きますから」  
神「それは制限ではなく、プライバシーや名誉に関わる事に関しての当たり前の苦情だがな」

「でも蓮舫のはいいだろ別にと思つ」

神「アレは相手がイメージばかりを追求する国会議員だからああなつたんだ。実際ジブリは113話見て大爆笑してたつて言うし、面白ければ大概の事は流せられる。ただし今回は相手が悪かつただけ。冗談が通じない国会議員相手では結果は目に見えている」

「あれ？なんだか神様キャラ変わつてない？」

注） 今回の神様の説明には、一部フィクションが含まれている可能性があります。第3者の情報に惑わされるのではなく、自分につかりと調べてから意見を出し合いましょう。1人1人のネットマナーが、多くの人を救えたらいいのにねw

「誰だよコレ・・・・・。まあいや、本編どうぞ」

## 第4話

転生してから何時間経つたことやら……。

俺は今、ナターシャさんと一緒に（ここ）重要なテストに出るよー。風呂に入っている。

「なんて羨ましいんだ！ 俺と代われッ！」「チーンジッジー・！・！」とお叫びになられている方も大勢いらっしゃると思います。

え？ 前話までと口調が違うって？

ちょっととした賢者になっている今の私には、今の喋り方の方がしつくつくるのですよハツハツハ。

でもですね、羨ましいといふのは浅はかつてモンですよ。

(だって、見えないビームが聞こえずらいんだもの……)

せめて、音だけでも拾つてほしかつたッ！　できれば感覚もあつてほしかつたッ！！

だが現実は悲しいかな。カメラがオフになつてるので視界はゼロ。全くの黒。さらに耳が無いから音聞こえないの、テヘッ。

そんなビームの高僧が喜ぶのかわからねえくらいの禁欲世界なのだが、ここは・・・・。

(お願いだ、3分間でいい。誰かこの俺を解放してくれ！……)

誰も解放してくれませんでしたw 神後でおぼえろー。

（つーか・・・待機状態ってマジで何もする事ねエな・・・。せめてナターシャさんと会話でもできたらなあ）

などと考えながら、俺は何もせず、無為に時間を浪費していた。え？ 一人称が戻ってる？

賢者モードから解放されたんだよ。

で、風呂から出た後俺は眠かつたから寝させてもらつた。

この状態でも寝るという感覚はある。さうに眠気も感じじる。不便で仕方が無いと思えるだろうが、これは実際ありがたい。

人間つて生物は、寝てないとストレスがたまる。そのストレスの発散先を自分で用意できない今の俺には、眠るという事ができるのは嬉しい限りだ。存分に寝かせてもらおう。

目が覚めると、そこはよく分からん場所だった。

「・・・・教会・・・・？」

目の前には見上げるほど大きなパイプオルガンが壁のようにそびえ立ち、横に長いイスが規則的にいくつも並んでいる。

その光景は、まさしく万人が思い描く『教会』だった。キリスト式の。

つてか、俺今喋らなかつたか！？

「あ・・あー。本日は晴天なり。じゅげむじゅげむ！」いつのすりき  
れビッグバンアターック！我が生涯にいっぺんの悔いな・・・よ  
つしゃあああ！…！」

やつと・・・やつと言葉が話せた！… おまけに身体もある！ なんとか知らんけど甲冑着けてるけど。外せないけど。

「う・・・うーん？」

俺が浮かれ上がりつているすぐ近くで、どこかで聞いたことのある声が聞こえた。

(ま、まさか・・・)

「・・・え？ うむ、どう・・・？」

ナターシャさん来たアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

(マジか！？ マジなのか！？！ 僕の深層意識が創り出した仮

想空間（夢）じゃないよね！！ 現実だよねーーー？

コレが現実なら・・・今、俺はナターシャさんと2人ツキリ！  
おまけにここ教会だし！もう死んでもいい！ あ、もう1回死んで  
たんだつけ。でも2回死んでもいいよ、グリーンだよ俺！！

「 ッ！」

刹那、俺の視界は反転し、背中と後頭部を強打する。やつぱり痛み  
はあるな。あと抑えつけられているは甲冑のせいで無いけど、身体  
が動かないからきっと抑えつけられているってわかる。

（つーか、さつき何があった！？）

俺が痛みに顔を顰めながら状況を確認する。だが視界が狭く、俺に  
何かした犯人を一瞬で見る事はできなかつた。

「あなたは誰！？ 私をこんな所に連れて、一体どうしようとして  
いたの！？」

「いや犯人アンタかよ！！」

声で解つた。犯人はナターシャさんだと。

予想外すぎる衝撃的事実に、俺は反射的に起き上がる。その時の力が凄まじかったのか、俺を抑えていたナターシャさんは吹っ飛ばされてしまった。

てかさつき、どういう体位だったんだろう。ひょっとしてすげく口かつたりして・・・。

(いや、そんなこと考えてるヒマないぞ今！ ナターシャさん俺の事すっげー睨んでるもん。敵意丸出しだもん)

とにかく、俺の事をわかつてもらわないと話が進まねえな・・・。何を言つたらいいものか・・・。

とりあえず、俺が福音だつてことから信じてもらうしかないか。

「あー、ええと・・・俺はアンタの持つてる『銀の福音』だ」  
シルバリオ・ゴスペル

「オイ俺！ もうちょっと言い方他に無かったのか！？ なんかいろいろおかしかつたぞ！」

ほら、ナターシャさんも全然信じてくれてな「まさか・・・そんな！」意外といけそうだ！

『IISに  
「いやホントだつて。教科書とかにも書いてなかつた?  
は意識と似たようなものがある』つて。その意識が俺

「…………たしかに、それは I S に関わる人間なら誰でも知つて  
いるわ。でも、あなたがあの子だという証拠が無い」  
あの子・・・・・あ、福音オレか。

「うーん……。」んな恰好して立派にいいていらがると思ひ?」

やつぢまつたああああーー！「ノン完全にドボンだよ！  
確かに理に適つてゐるけどコレは無いだろ！ いくら思いつかなか  
かつたつてコレは酷過ぎるだらおおおおーー！」

「そ、そうね・・・。あなたの言ひ通りだわ

ほら、ナターシャさんちょっと引いてるよ！ 多分兜みたいな物付けてるからわからんないと思うけど、俺もう涙目だよー！

「んで たぶん、ここのまは俺の・・・福音の深層意識みたい空間だ・・・・・と思つ

「ちよつと待つべし。悪いが、この件は」

「俺だつてさつきまで何もない真っ暗な空間で1人ぼっちでいたんだよ！ そんな時にこんな場所だけど操縦者のアンタと会えて、嬉

じへて混乱してゐるんだよ……」

・・・・・ひでまた恥ずかしい事をおおおおお……

確かに寝ていたはずの私と同じ空間にいた甲冑の男はいつの間にか

「たぶん、ここは俺の……福音の深層意識みたいな  
空間だ……と想つ  
彼は確かに『思ひ』と言つた。いはせ彼…………あの子（福音）の  
空間じゃないの？

「ちょっと待つてー 思ひついでないこと一?」

私は彼に訊いた。ここでもし的外れな解答を返してしまつたが、  
すぐにも殺さなければならぬ。

相手は男。I Sは使えない。いざとなれば私の持つてているこの鐘・・・  
・・銀の福音シルバリオ・ゴスペルでこの教会ごと吹き飛ばしてしまえば・・・・・。

「俺だつてさつきまで何もない真っ暗な空間で1人ぼっちでいたんだよ！ そんな時にこんな場所だけど操縦者のアンタと会えて、嬉しくて混乱してるんだよ！！」

彼は確かに言つた。私の事を『操縦者』と。

彼は自分の事を福音だと言つていた。そしてその操縦者が私だと言い当てた。

この子・・・・銀の福音は、その全ての情報が国家レベルでの機密とされている。

だから外部の人間が、その事を知つている筈はない。

あの子を開発した研究員なら誰でも知つてている。でもそれ以外は・・・  
・・大統領ですら、私が操縦者だとは知らない。だから外部の人間が知り得る事なんて有り得ない。

さらに、開発チームは選び抜かれた少人数で構成された。だから顔も声も私はよく知つていてる。  
でも、あんな声を持つ人はいなかつた。

「（だとしたら・・・・・彼は本当にあの子なの・・・・・？）」

でも、ESの深層意識と対話するには長い年月をかけてお互いを理解し合わないといけない。

なのに、たった数時間搭乗しただけの私の目の前に現れるのかが解らなかつた。

「（いえ。ESにはまだ私たちには解らない事が多い。こういう現象があつてもおかしくは無いハズ・・・・それに）」

それに彼は・・・・『1人ぼっちだった』と言つていた。

何もない空間で、ただ一人、寂しい思いをして過ごしていたんだと思う。

それに、私に会えて嬉しかつたとも言つてくれた。

「（なんだかんだ言つても・・・・まだ生まれたばかりの子供なのかもね）」

だつたら私が、育ての親になつてあげてもいいわよね。

## 第4話（後書き）

神「まさかの 入りましたね」

「ホントですねー。どうしてこうなったし」

神「あなたが話引き伸ばすために作ったんでしょう?」

「でもここまでとは・・・。暴走したとしか言いようが無い」

神「それで、これからどういう風に進めて行く気ですか?」

「あと1話か2話こんなカンジの話をして、原作3巻に侵入しうかと考えています。

それより、ホントキャラが安定しないよね、きみ」

神「これが本来の私です。でも、それでは10話まで持たないんじゃないですか?」

「一応6巻でも名前だけ出てきてるから・・・・・あ、でも凍結処理されてるから動けないのか。本格的に継続が危ないことに気付いた」

神「また終る終わる詐欺か。いい加減にしたらどうだ

「イイじゃん別に」

## 第5話（前書き）

「この前書き後書きの座談会が不評な件について  
神「知らん」

待機中で使える機能と、使えない機能がある事が徐々にではあるがわかつてきた。

まず、外部との接觸が全くと言つていいほどできな。音も聞こえなければ周囲を見る事もできない。

あと、この甲冑を強引に引き剥がそうとしたらものすり傷で痛かった。やっぱコレ俺の一部だった。痛覚だけある。

それで、中身が多分だけど無い事が分かった。わかりやすく言つならばアルフォンスのような状態だ。

あと、急にここに来たのってなにか理由があるんじゃないかヒマだったので考えた結果、俺の意識が完全に福音の意識？を蝕んだところ結論に達した。

これもし福音（の意識）が蘇つたりしちゃつたら、どうなつひづけんだううね。まさかその為の甲冑とか？ どうせなら剣も付けてくれよ。

（それでひもヒマだな。なんか起こんねえかな・・・）

ボーッと真っ暗な、あるのかどうかも分からぬ天井を見上げてた時だった。

一瞬にして視界が変わり、目の前には虎模様のタイガーストライプI.S.が浮いていた。

(・・・・どういづ状況?)

私は、変な夢を見た。

ベッドで寝たと思ったら、銀色の甲冑を着た男が騒いでいたので起これ、起きた場所はどこだか知らない大きな教会で、その甲冑の

男の話によると自分は銀の福音で、その教会は自分の深層意識がどうのこうのといふらす、常識で考えたらいろいろとおかしな夢。

そして目が覚める直前に、あの甲冑の男は「あんたと会えて嬉しかった」と言っていた……。

といつ話を、同僚のイーリに相談したら……。

「なにそれ気持ち悪い……」

即答だった。

「ちよ・・・ナタル、それきっとストーカーだぞ」

「なんで夢の中にストーカーが現れるのよ……」

「アレだよ、アレ。寝てるナタルの耳元で、そのストーカーがそつと呴くんだよ。で、ナタルは夢でその言葉を」

「それ以上は言わないで！　尋麻疹が出る……」

私は背筋に寒気がしたが、反射的に耳元を手で隠すよつとしていた。

軍の宿舎で寝泊まりしているからと聞いて、油断はできない。その警備がやつてくるかもしれないといつ、自分でもわかるくらい自意識過剰な疑心暗鬼に陥ってしまった。「この田の前のイーリ（バカ）のせいで。

でも・・・あれば、ただの夢じゃなかつた氣もしないでもない。そんなあやふやでもやもやした気持ちが、私の心の奥底で燃つっている。

「（なにか・・・大事な事を忘れていくよ）」

あと・・・まるで、誰かが私のすぐ近くにいるような気が・・・。

「（やつぱり、ストーカーかしら・・・？）」

本格的にそっちの線が濃くなつてきたので、私はストーカー撃退用の罠を設置しようとした時だった。

「おい、ナタル。そいつの実戦テスト、そろそろ始めるんじやないのか？」

「そういえばそつね。もづ行かなくちゃ」

今日は福音（この子）の実戦でのデータを收拾するためのテストがあるのを、あの夢のせいですっかり忘れていた。

そして数十分後。

私とこの子（福音）は、昨日一緒に闘ったバトルフィールドに来て  
いる。

「ファイルスさん、準備を始めて下さい」

「了解しました」

研究員の指示に従い、私は銀の福音を身に纏う。

そして私と対峙しているのは・・・・さつきまで私と話していた、  
イーリ。

彼女のIS、『ファング・クエイク』は安定性と稼働効率を重点的に  
昇華させたバランス型のIS。

「（つまりそれは、長期戦に持ち込まれたら不利ということ）」

さらに今回は、ファング・クエイクのデータも取るために全力で勝

負じる上からお達しが来ている。さればこの子に勝たせてあげたいのと、イーリに負けたくないといつ私情も入ってくる。

でも・・・前回の起動テストみたいに動けなかつたら、イーリ相手ではまず勝ち田が無い。

「 ） もうひとつ、動いてくれるよな・・・（ ）

もつ昨日の夢が、夢じやなかつたのだとしたら・・・

「 ） のつかへと、動いてくれるはず・・・（ ）

田の前に驅る虎模様の工札を、俺は見た事が無かつた。

（でも、あの虎模様になにか引っ掛かるんだよな〜）

詳しいデータが欲しいと俺が思ったとき、視界に詳細な情報がぽこぽこと浮かび上がってきた。

（なになに・・・・・名称、『ファング・クエイク』。操縦者は『  
イーリス・コーリング』か）

あ、たしか6巻で出てきたナターシャさんの親友だったつけ？

ISの方も第3世代で、エネルギー効率重視型か。

（まだ実戦と言える経験をほとんど積んでいない俺に、米の代表さんのが務まるのか？ 答はもちろんノーダ）

だけどこいつにもナターシャさんがいる。正直俺のヤル気さえあれば、この人が何とかしてくれるよきっと！

・・・・・よし、まずは《銀の鐘》で一気にシールドエネルギーを削つてアドバンテージを稼ぐか。

『戦闘を開始して下せー』

『イイイイイとアラームが鳴り響き、俺は銀の鐘を発動させようとする。

(あとはナターシャさんが起動させるだけ……)

俺がモーションをイメージした瞬間だった。

ガキィインッ!!

突然、車に撥ねられたような衝撃が俺の身体に伝わった。

## 第5話（後書き）

「このなんといふでなんだけど、PVアクセス4万&ユーチューブ数8千越えおめでとう。」

神「普通前書きじゃね？」

「いいんだよべつに。あと、この話を読んで『逃げたな』と思つた方。この展開は初めから考えていた展開ですので、そこだけは間違わないで下さい」

## 第6話（前書き）

これから座談会失くす方向でお願いします。時短の意味もあります。

あと、この話から主人公のキャラがガラツと変わっていくかもですが、それは徐々に精神がエリと同化してきているからです。

（なんだ・・・！ 何が起こったッ！？）

突然の衝撃に、俺は『銀の鐘』シルバー・ベルの発動をキャンセルさせてしまった。

あの攻撃は、エネルギーを溜める一瞬の時間と、それを全方位に放出するための僅かに上昇しながら回転する行動が必須となる。

後者をしないで発動させた場合、最悪撃つた直後に爆発してその爆風に飲み込まれる恐れがある。

これは全て、先日の試験稼働で一度だけ使った銀の鐘を、IASの計算力とか手に入れた俺が独自に観察、研究して立てた仮説だ。

そして、さつきの車か電車に撥ねられたような衝撃の正体も、すぐに理解する事ができた。

その正体とは  
のだ。

相手の打撃。それも、超高速の拳によるも

俺の頭の中では、どうやってそこまでの加速を一瞬にして可能にさせたのかといつ思考に入っていた。そして、その答は一つしかない。

(間違いねエ・・・・・瞬時加速だ・・・・・！)

あの機体・・・・『ファング・クエイク』はスラスターが4基あって、その4基を個別に瞬時加速させる『個別連続瞬時加速』リボルバー・イグニッショングーストを使えたはずだ。

この距離でそのスラスターの2基を使ってそれを行つたとしたら、銀の鐘の攻撃直前の隙をつくまでもなく、人の視覚による反射神経を遙かに凌駕するスピードで接近できるだろう。そこに掛かるGは、ISが相殺してくれるからな。

多分、イーリスさんは戦闘開始直前までブースターにエネルギーを溜め続け、エネルギー充電を半ば無効にした形で強襲してきたのだろ？。

(「こしても・・・どじが『安定性と稼働効率を重視した機体』だよ！ 『どからど見ても超高機動型だろうがッ！』

いや・・・愚痴つてゐる余裕は全く無いぞ。こちとらまだまともに戦つた事が1回も無いんだからな。

(クソツ・・・考えろツー どつやつて戦えばあの機動力を封殺で  
れるー？)

・・・  
いや、違う。

機動力を抑えるとか、重要なのはそんな事じゃねエ。

(本当に重要なのは、どりやつて『勝つか』だろうがッ

！－）

「つく・・・・・まさか、出だしから切れを使つてくれるとは思わなかつたわ」

『ナル相手だと、こっちも手加減とかできないんでな』  
イーリの声がオープン・チャンネルから私の耳に入る。

でも、私の頭の中ではイーリとの会話とは別に、さつき突然銀の鐘の発動アイコンが出てきたのかをずっとと考えていた。

「（やつぱり・・・・・私の意志だけじゃない、もう一つの何かも福音に影響を及ぼしている気がする・・・・・。）

そう考えるのならば、昨日見た夢は本当だつたこと……ひつひつ、まだよ。まだ結論を出すには早すぎるので（）

まだ私には・・・銀の福音（ヒノキ）の事が、何一つわかつてないのだから・・・。

『まじめうー ボーっとしてゐただつたひじから行かせてもらひますHー?』

イーリの声に、私は今彼女と戦っているのだと再認識をせられた。

「（そう・・・今はデータ収集目的と言いつても、ヒヒによる戦闘中・・・。余計な事を考へてるヒマは、操縦者の私には一瞬たりとも在りはしない）」

イーリの駆るファング・クエイクが、今度もまた一瞬で私を聞合いで捉えた。  
でも今回はただの瞬時加速だったみたいで、さつきはじの速さを無かつた。

「（二）のタイミングなら間に合ひついで」

私は福音の多方向推進装置の砲門を前方に向け、エネルギー弾を発射する事でファング・クエイクを迎撃する。

でもそれはイーリも承知の上だつたらしく、主武装のその拳でエネルギー弾を弾きながら殴つてくる。

「相変わらず……ムチャクチャね、あなた」

『日本には【無茶が通れが道理も引っ込む】って諺があるんだぜ、ナタル！』

イーリはいつエネルギーを溜めたのか、またも個別連続瞬時加速で追討ちを仕掛けてくる。

私は回避を試みるけど、思ひよつに福音が動いてくれないから防戦一方だつた。  
それでも昨日の試験稼働よりは数段動きやすくなつていたのは、私にとつてせめてもの救いだつた。

シールドエネルギーの残量は、残り186……。

「（二）で反撃をしないと、勝ち目は完全に無くなつてしまつ

「（一）」

『んおつー?』

私はイーリの拳を両腕で掘み、まるで羽を広げるクジヤクのよひこ、福音の翼を大きく開き、エネルギー弾を撃ち放った。

そしてさつきのお返しと言わんばかりの蹴りを、イーリの腹に浴びせて距離を取る。

『やつぱりやるなあ、ナタルは』

それでも、その直撃を受けたはずのファング・クエイクはダメージは受けているようではあったが悠然と宙に浮いていた。

「（もしかして出力が低下してるの……！？）でもそんな警告は出てない……」

やつぱり、この子は他のヒーローとは、決定的な何かが違う。でも、そんな事つつ……。

「（イーリ…………負けたくない……）」

（あ～、くそったれが！　人の事ボコス力殴りやがって！　攻撃当たると痛エんだぞこっちは！）

さつきの連続攻撃だつて、ナターシャさんがどうにかしてくれなかつたら腕が折れてたかもしぬなかつたぞ！　責任とれるのか！？

それと、防御力高すぎるだろ。なんでエネルギー弾をモロに受けて、さらには蹴りも食らつてそんな何事もなかつたかのように佇んでるんだよ。心折れるだろ。

（つーかこれ、俺がナターシャさんの足を引っ張つてるからじゃないのか？）

俺が弱音を吐き始めたのと同時に

『今度もこっちから行かせてもらひやッ！－！？』  
イーリスさんは身体をかがめ、瞬時加速の構えを取る。

マズいッ！ 今度またあの連撃を食らつたら、残りのシ  
ールド・エネルギーじゃ持ち堪えられないッ－！

畜生・・・！ れじやあ、俺のせいで負けちまうじゃねえか！

(・・ 負けたく、ねエ ツ－)

イーリスさんは個別連続瞬時加速リボルバー・イグニッシュン・ブーストで俺に向かつて突進んでくるのが  
わかる。

だが、これは俺がE.Sのハイパー・センサーで直接確認できている映像だ。ナターシャさんはここからさらに、目から脳に、そして筋肉へと情報を伝達させなければならない。

つまり

人間の反応速度では、間に合ひはずが・・・無い

・・・・・

ハズだった。

ガキイイイン！！！

金属音がバトルフィールド中に響き渡った。

だがその硬質で無機質な音は、福音からではない。

『そんな・・・・・有り得ない・・・私の攻撃に、反応できるだなん  
て・・・・・』

イーリスさんの乗るI-I、ファング・クエイクが、福音・・・・・つまり、俺に殴られた事による音だった。

（いや、驚いてるヒマは無い。すぐに追撃して少しでもダメージを  
与えないと・・・・）

ズダダダダダダ！！

羽ばたくようにエネルギー弾を浴びせ、俺は一度後ろに下がる。

（今までと感覚が違う・・・・！？ 次に何をすべきかが一瞬で解る  
よづな ）

その時、俺は気付いた。

気付いたのに理由なんてない。理論もない。だがそれでも、理解した。この決定的で絶対的な変化に。

(わかる・・・ナターシャさんが何をしたいかが、全て  
! ! )

## 第6話（後書き）

祝！ 7万PVアクセス＆1万3千ユニークアクセス突破！！

## 第7話（前書き）

第7話です。お待たせしました。

## 第7話

「（『アーティファクト』をつかまえど反応速度が全然違う……）

「

視界が一瞬でより鮮明なものへと変化したと思つたら、身体が軽くなつたような感覚がした。

いままであった『ゼレクション』も完全に無くなつていた。むしろ、より動く。

「（行ける……今のこの手となら、相手が誰でも負ける気がしない……）」

私は心の底から溢れてくる高揚感をギリギリのところで抑えながら、目の前にいるイーリを見据えた。

『おいおいナタル、手を抜いて油断させるなんて卑怯だぞ…』  
プライベート・チャネルからイーリの声が聞こえた。

「手加減していたつもりは無いわ。私はいつでも本気よ」

私はイーリにそれだけ言って、スラスターを使った急加速で接近し、ファング・クエイクの胸部装甲の部分にスピードを乗せた渾身の蹴りを食らわせる。

そして吹っ飛ばされたイーリの背中に回り込んで、背中に胴回し蹴りを浴びせて宙に舞い上がる。PICOを使って姿勢を維持し、翼にある銃口を全てイーリに向ける。

ズダダダダダダダダ

ツ！！！

放たれた羽のようなエネルギー弾の多くに手応えを感じた。

そして同時に、この子の性能の高さを思い知られた。

「（こんな超次元的な戦闘を可能にしができるなんて、夢にも思わなかつたわ）」

そしてこの運動性には・・・・きっと、あの子が関係している。

煙幕の中に立つファング・クエイクを確認した時、俺は少しだけ戦慄した。

さつきのドラゴンボルのような連続技をモロに食らって、まだ立つていられる事に俺は若干の恐怖心を抱いたからだ。

(でも・・・なんだか、この安心感は)

まるで母親に護られているような、それに似た安心感が俺を包み込んでくれていた。

でも、ここりで勝負を着けたいな・・・。そろそろ身体の痛みがキツくなってきた。

(『銀の鐘』・・・・アレで決めるしかない)

俺は『銀の鐘』の発動モーションを取り始めたが

ボウツ　　と爆煙を押しのけ、ファング・クエイクが俺に凄まじい速さで突進んでくる。

だが・・・見える。その姿が、しっかりと！

俺は個別連続瞬時加速<sup>リボルバー・イグニッショングースト</sup>で突撃していたファング・クエイクの拳を、まずあえて左肩の装甲に当てる。

だが衝撃を後方に流すように身体を回し、その時に受けたエネルギーを回転する力に変換する。

(「コイツで・・・最期だ！！」)

隙だらけになつた背中に、至近距離で放たれた《銀の鐘》を直撃したファング・クエイクは・・・・・ようやく今、墜ちた。

「こちらが福音の戦闘データです」

「」「苦労」

女性研究員に書類を受け取つた初老近い男性の研究員は、パラパラと書類をめくつてあるページをじつと見つめていた。

そのページにあつたのは、戦闘時の福音の稼働率。

そのグラフを見ると、初めは10パーセントにも満たなかつたのに、戦闘の終盤には95パーセントを超えていた。

少なくとも、彼はここまで稼働率を見た事が無かつた。それほどまでに、その数字は異常だつたのだ。

「操縦者とEISの同調・・・・面白い」

男は一人、静かにそう呟いた。その言葉には、福音の【兵器】としての可能性を見出していたのが覗えた。

## 第8話（前書き）

いつも、おひやしづりです。更新が滞ってしまって申し訳ありません。  
ん。

(寝たい・・・・・)

俺は今、それだけを考えてただただ無意味に時間を浪費している。

前にも同じことを言つた気がするが、人間は眠らなければストレスが溜まり、イライラしてしまうのだ。そして俺はこの福音になつちまつた時から、一睡もしていない。これがどういう意味かわかるか？

とにかく、俺は一度ぐっすり寝て、清々しい目覚めを味わいたいのだ。できればあの何物にも代えられない、布団の温かさも感じたい。

だが現状はどうだ？ 眠気はあれ以来一度もこないし、そもそも肉体のようなものはあっても横になつたら床が冷たいし、何より寝にくい。ちなみに布団も無い。あるのは感触と虚無感だけだ。

何？ 何もないがある？ バカ言つた。結局なにもねえじゃねえか、このハムスターが。

ああ、言い忘れていたが今の状況はあの教会のようなだだつ広い空間だ。そこでたつた1人、大の字になつてゐる中世の騎士っぽい甲冑が俺。何も知らない人が来たら不審者扱いされる事間違い無しだ。前にナターシャさんがキモがるより先に攻撃してきたのは、あの人

がIRSの国家代表操縦者だからと勝手な解釈をさせてもらおう。 ラウラもきっと同じ事してるって。ああいの状況なら。

などと色々考えて時間を潰しつつ、ナターシャさんが寝てこっちに来るのをだらだらと待つてゐるつもりだったのだが、その夜はぼつちで過ごした。

IRSのコアネットワークをフル活用して、何とか時計機能を使えるようになつたのは俺にとって非常に大きい。せめて時間くらいは知りたい。人間は時間を感じられる唯一の動物だと、どこかの哲学者が言つてた気がするし。

なんでナターシャさんが来なかつたのかは・・・・・今から考えるか。

あの変な夢は、今日は見ることがなかつた。

もしかしたら、あつちに行くには何か特別な条件が必要なのかもしれない。

「（まだまだ機会チャンスはあるわけだし、焦らないでも大丈夫よね）」

色々と聞きたい事はあるけれど、それは次に会つたときになつちゃつたわね。

私はベッドから出た後、一度シャワーを浴びてから食堂に出向いた。

島を丸一つ使つてゐるこの軍事研究施設に滞在している軍人と、ここで働いている研究者たち。そして私やイーリのよつなEISの操縦者は、それぞれ専用の食堂で食べる。

ただ、私たちの方は他の2つとは明らかに違つ。

どの国もヨーロッパの機関にせよやつ過ぎなほどに資金を出してこぬから、そつ考へると当然なのかもしないけど・・・・

「（照明がシャンデリアになつて、6人分しか椅子がない）の部屋を、本当に食堂と言えるのかしら？。」

「さうかと言えば、ヨーロッパ一流のレストランと云う表現の方が適切だと思つ。

そして何より、ここを6人で使つているところを私は見たことがない。設計者は一体どんな要望を受けたのだろうか。

「ナタル～！　いらっしゃいよ～！」

・・・・そんな事を考へてこるのは、どうやら私だけのようね・・・

「それで、あのストーカーは来たのか？」

「もうその話はいいわ」

私はパンをちぎりながらイーリに答えた。

「あ、や。ところでナタルも、今日は超音速下の試験稼働だろ？  
テストパイロットは面倒くさい仕事多いよな」

「別に私は、面倒とか思わないけど」

「ふーん。ま、私もモーター越しに見学をせてもいいし」とさすが

「どうぞお好き」

いつもと同じように、私とイーリは朝ごはんを食べた。

でも、普段通りだったのはそこまでだった

。

## 第8話（後書き）

最近短いですが、今年中にはあと一話は投稿したいですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4278z/>

---

IS『に』転生ってふざけんな！

2011年12月28日21時40分発行